

## ボールルームダンスの“本質的特性”に関する研究 ：ボールルームダンスの“魅力”を指標とした自由記述の調査分析

實方宏海 (神戸大学人間発達環境学研究科)

The purpose of this study is to abstract the characteristics of ballroom dancing, focusing on its “instinctive value.”

The ballroom dancing is a dance form referring to couple dancing, known as “shakou dance” in Japanese. In the recent years, the ballroom dance has received attention from the mass media, i.e. TV shows, movies, or magazines. However, the understandings of ballroom dancing are mixed, and lack consensus. Although the related studies reveal the various functions of ballroom dancing in each context, they give attention to just the various external values and no attention has been paid to the instinctive value, that is, the fundamental characteristics of ballroom dancing.

To clarify the characteristics of ballroom dancing in concrete term, free description data were collected over the five subclasses, that is, “movements by physical contact through the part/s of the bodies,” “dancing by a man and a woman,” “rhythm,” “music,” and, “others.” Questionnaire respondents included 1) 8 competitive ballroom dancers, who had participated the collegiate ballroom dance team and had experienced as an amateur competitive ballroom dancer for more than five years till now, 2) 10 novices from two collegiate ballroom dance teams who had just begun their dance career, and 3) 13 intermediate who had been participating the collegiate ballroom dance team. Their free descriptions were processed in KJ method and each subclasses offered several factor of the characteristics of ballroom dancing, described below.

(1) “movements by physical contact through the part/s of the bodies” – First, the pair become able to carry out the movements that a solo dance can hardly do. Next, excellence of performance and ecstasy of dancing multiply. Furthermore, the amateur competitors find out the “attractiveness” in their emotional and physical harmony.

(2) “dancing by a man and a woman” – At first, the beginners are sensitive to their partner’s masculinity /femininity, then they gradually accept the new, different relationship between a man and a woman, which is not intended for the “sexuality.” It is also presented that the dancers achieve to the better understanding of the role of male and female through the dance creation.

(3) “rhythm” – As the factor of the characteristics, “diversity of rhythm” is reported, as well as “emotional arousal” which any other dance form brings to dancers. The result also shows that the dancers experience various kinds of rhythm, and then feel various emotions through their dance.

(4) “music” – Four factors are abstracted for this subclass; that is, 1) variability of dance image and performance, 2) emotional and physical influences, 3) pleasure of dancing to music, and 4) anew appreciation of the dance music. It can be presumed that the appreciation of the dance music is peculiar factor of ballroom dancing, for the dance music often brings us cross-cultural musical experiences.

(5) “others” – The data suggests that the novices simply enjoy their dancing and gradually become conscious to the appropriate “lead and follow,” and the emotional harmony as well. The data also implied that, as the dancers progress in their career, they recognize the “attractiveness” of ballroom dancing in further detail.

Based on the factors abstracted, new questionnaires are prepared for the future research. It is expected that a large number of ballroom dancer be surveyed, statically processed, then the relevance of each factors and “instinctive value” of ballroom dancing be clarified.

## 1. はじめに

ボールルームダンスというダンスは知らなくても、社交ダンスであれば、「男女が2人で組んで踊るダンス」とイメージできるであろう。ボールルームダンスは、社交ダンスの現代的な名称である<sup>1</sup>。近年さまざまなメディアで取り上げられるようになったボールルームダンスだが、その認知度はさまざまで、テレビで盛んに焦点が当てられていた、競技会に向けて血のにじむような練習をするストイックなスポーツのイメージで語るものもあれば、定年を迎えた高齢者層のおだやかな趣味というイメージを持つ人もいる。ヨーロッパの宮廷舞踊や明治時代の鹿鳴館を思い浮かべ高貴な趣味、教養とを感じる人もいるだろう。このように、多様なイメージを持つボールルームダンスは、その本質を一言でいいあらわすのは難しい。「ボールルームダンスの特性」を語ろうと思ったら、その歴史的な変遷から特徴を見出すことも、身体科学的なアプローチで運動強度や心理的效果を測定しそれを「特徴」とすることもできる。

では実際、「ボールルームダンス」に対して、どのような研究がなされているであろうか。

ひとつは、ボールルームダンスに関する史的な研究である。代表的なものに、永井の、『社交ダンスと日本人』<sup>2</sup>がある。これらは、社会学者でもある著者の視点を盛り込んで、ボールルームダンスの日本における変遷を紐解き、日本人にとっての「ボールルームダンスという風俗」の位置づけを明確にしようとした研究である。そこでは、日本人にとって、「男女2人が公衆の面前で踊る」というダンス形態が、日本社会の中でどのような衝撃を与え、どのように受容あるいは拒否されてきたか、という変遷が描かれている。そして、スキャンダラスな「社交ダンス」と、過熱化する「競技ダンス」という二極化の道をたどった、日本のボールルームダンスの背景が明らかにされている。

次に、教育現場におけるボールルームダンス学習の授業研究がある。平成11年に告示された新学習指導要領（高等学校）では、専門教育を主とする「体育科」で「社交ダンス」を学習することが出来るようになった。このことを受けて、小学校・中学校・高等学校では、それまで、「創作ダンス」「フォークダンス」「その他のダンス」が主要内容であったところに、「現代的なリズムのダンス」が加わり、このリズムダンスの教材としてボールルームダンスを取り上げることも検討されるようになってきた。財団法人日本ボールルームダンス連盟（以下JBDF/Japan Ballroom Dance Federation）では、2002年から「学校体育学習支援プロジェクト」（翌、2003年「学校学習創造支援プロジェクト」と改名）を立ち上げ、全国体育

学習研究会と連携し、また、モデル校を指定して、ボールルームダンス学習の授業研究を行っている。その報告も公開されており<sup>3</sup>、また、各教員による自主的な取り組みの報告もある<sup>4</sup>。

さらに、スポーツとしてのボールルームダンスの生理学的・体力科学的研究がある。この例として、生涯スポーツとしてのボールルームダンスの運動強度を測定した例<sup>5</sup>、また競技スポーツとしてのボールルームダンス選手の体力特性を調査した例<sup>6</sup>などがある。ただし、ボールルームダンスの取り組み層の偏りから、前者の研究の調査対象者は高年齢層、後者の対象は10代から30代の若年齢層である。

このように、先行研究を概観していくと、ある傾向がうかがい知れる。歴史的研究は、日本においてボールルームダンスがどのように受け入れられてきたのかという受容史的研究であり、授業研究や生理学的・体力科学的研究は、教育や体力科学分野においてボールルームダンスがどのような効果をおよぼすものであるかという機能研究、いわば、ある特定の文脈の中で、どのような機能を果たしているかという、「目的に即した価値」の検討ということである。つまり、従来の研究はいずれもがボールルームダンスそのものが持つ「本質的価値」についての研究ではない。

ダンスとは、そもそも行うことに理由は要らない性質のもの、という見方がある。三浦らは「人が自発的に踊るのは、踊ることが楽しいから、他では味わえない面白さがあるからといえる。」と述べている<sup>7</sup>。なぜダンスをするのかといえば、そこにリズムや音楽やステップが存在するからであり、ダンスのもつエネルギーに魅せられている、という見方である。三浦らは、このように、「それ自身において、それ自身についてよいものとして判断される価値」<sup>8</sup>を「本質的価値」と説明し、また、これと区別して認識されるべき価値観として「道具的価値」を挙げている。「道具的価値」は、「何かのためによいからという理由で判断される価値」<sup>9</sup>である。ボールルームダンスにおいても、それがどのような文脈で述べられていても、変わらない共通項として、冒頭に述べた「男女が2人で組んで踊る」ということがあり、この概念がボールルームダンスの「本質的価値」を考える上では重要なのではないかと筆者は考える。

三浦らは、「生涯のスパンでダンス教育を考えると、人は何故踊るのか、他では味わえない面白さは何なのかの検討」<sup>10</sup>の重要性を述べている。ボールルームダンスも、将来、教育現場やそのほか日常の中でこれまで以上に上げられる可能性を思えば、ボールルームダンスとはそもそも何か、ということは十分に検討する必要があるだろうし、その中で、どのような文脈においても共通

の特徴といえる「男女2人で組んで踊る」ことを具体的に検討することの必要性も浮かびあがるのではないだろうか。

このような「本質的価値」の観点に立って、「ボールルームダンスの本質的特性」を見出そうとすることが、筆者の目指すところである。ここまで挙げてきたボールルームダンスの先行研究は、三浦らのいう「道具的価値」の観点から、「男女が2人で組んで踊る」ことをすでに自明の理として、このことがどういった機能をもたらしめているのか、という視点でなされている。これに対し、筆者は、「2人で組んで踊る」「男女で踊る」ということが、そもそもどういう特徴をもっているのかを、具体的に検討すること試みている。

本稿は、その第1段階として、ボールルームダンスの競技選手に、ボールルームダンスの「2人で組んで踊ること」「男女で踊ること」および、比較対象としてダンス全般の特徴でもある「リズム」「音楽」「踊っているときに感じていること、踊っているときの気持ち(=動き)」の5つの指標について自由記述を求め、具体的にどのような要素が抽出されたかについての調査報告である。

## 2. 競技選手を対象とした「ボールルームダンスの本質的特性」抽出調査

### 2-1 調査内容

調査では、ボールルームダンスの踊り手たちの、日頃からのダンス経験をもとに、踊っているときにどのようなことを「魅力」と感じているか、自由記述による回答を求めた。その際には、前章で述べた、ボールルームダンスの「本質的特性」と深い関わりをもつと考えられる、(1)「2人で組んで踊る」および(2)「男女で踊る」という項目を設け、これらに関してどのようなことが魅力として上げられるかを記述してもらった。また、「ボールルームダンス独自の特徴」と「ダンス全般にイえる特徴」の差異を調査するために、舞踊の基本的な要素である(3)「リズム」<sup>11</sup>および(4)「音楽」の項目も設定し、これらに関しても同様に自由記述を求めた。また、舞踊の基本的な要素としてもう一つ「動き」があるが、別に設定している「2人で組んで踊る」と、舞踊全般に共通の「動き」、すなわち「リズムにあわせて体を動かす」ということとの区別をつけるために、(5)「踊っているときに感じる、踊っているときの気持ち」という名称で項目を設定し、「動く(=踊る)」ことの魅力に関して自由記述が幅広く得られるよう配慮した。すなわち、項目は全部で5項目である。この5項目が本質的特性につながる「魅力」として妥当かどうか、という検討が今回は不十分ではあるが、先行研究や、ボールルーム

ダンスの現場で頻出する概念であることから、本調査の予備的位置づけの本稿では、これらを用いることとした。今後の研究で、結果とあわせて検討を重ねていきたい。

これらの集計内容は、KJ法による分析を行い、ボールルームダンスの「魅力」特性を抽出した。また、ここで抽出された要素をもとに、今後の研究で統計的解析を行うために使用するアンケートの質問を構成することも目指す。

### 2-2 調査対象

今回の調査では、詳細にわたっての具体的な記述を求めため、競技選手を対象とした。競技に向けての練習は、技能の向上やパフォーマンスの深化を目指し、互いの身体や動きを具体化し、言語化するプロセスである<sup>12</sup>。「なんとなく動いたらできた」では、いざ競技会のときに同じことが再現できるか、保証はない。身体の使い方、2人の動きの合わせ方、リズムのとり方などに注意を払い、向上を目指すとともに、意識的に何度でも再現できるように定着させ、さらにまたその技能を向上させる…これが練習のプロセスであり、競技選手は自身の練習を通して、常に自分や相手の身体や動きについてとても鋭い感覚でとらえ、それを分節し、言語化していると考えられる。このように、競技選手を調査対象とすることで、より具体的で核心に迫った回答が得られることを目指す。

今回は、「初心者」「熟練者」および「中間層」を対象として、各層の比較も試みた。

「初心者」は、大阪および神戸の大学競技ダンス部<sup>13</sup>所属の1回生を対象とした。調査の対象となった1回生は全員2008年の4月にボールルームダンスを始めたばかりで、調査の段階では、週3回の部活の練習会で、ジルバ、ワルツ、ルンバのステップを習い、上級生に組んでもらいながらの指導を受けるレベルであった(詳細の内訳については表1参照、「熟練者」「中間層」も同様)。

「熟練者」は大阪、京都、奈良在住のアマチュア競技会に出場する競技選手を対象とした。彼らは、大学在学中に各大学の競技ダンス部で活躍しており、大学競技ダンス部のOBOGである。卒業後3年ほどの充電期間を経て競技会に復帰した例もあったが、全ての被調査者は現在に至るまで5年以上競技を続けている。調査の時点で、2008年度のアマチュア競技会西日本大会で決勝戦進出(ベスト6)経験のあるレベルであった。調査では「アマチュア」とラベルした。

この2つの対象の「中間層」として大学競技ダンス部の4回生を設定した。彼らは、1年生に指導する練習会に加え、ほぼ毎日大学の空き時間を利用して練習に励んでいる。所属大学は「初心者」

表1 調査対象者のサンプル数、年齢および競技年数の平均と分布

		M	F	合計
アマチュア	サンプル数	4	4	8
	平均年齢	29.75	28.25	29.00
	標準偏差	2.50	2.06	2.27
	競技年数	10.50	10.00	10.25
4回生	サンプル数	8	5	13
	平均年齢	21.75	21.40	21.62
	標準偏差	0.46	0.55	0.51
	競技年数	(4)	(4)	
初心者	サンプル数	4	6	10
	平均年齢	18.50	18.17	18.30
	標準偏差	0.58	0.41	0.48
	競技年数	(0)	(0)	

・「4回生」および「初心者」の競技年数は筆者の設定による。回答の際に記入してもらったが、「4回生」の競技暦は、3.5～5の範囲であり、「初心者」で、入学前にボールルームダンスの経験があるものはいなかったため、支障はないと判断した。  
 ・サンプル数は分析対象のサンプル数である。「4回生」のみ、3サンプルから得た回答が、回答態度に不真面目さがうかがえるものであり、分析対象として適切ではないと判断されたので除外している。

と同じ大阪および神戸の大学である。「4回生」とラベルした。

### 2-3 調査期間、配布および回収

調査期間は、大学競技ダンス部所属の学生に対しては2008年5月から6月にかけて行った。アマチュアの選手に対しては、2008年9月に行った。大学競技ダンス部には、調査対象となる1回生および4回生に調査の概要について一斉に直接説明し、2週間を回答期間として郵送にて返送を求めた。

アマチュア選手には、調査を依頼した個人にひとりひとりメールにて概要を説明し、郵送もしくは直接配布し、2週間を回収期間とし、郵送にて返送を求めた。

### 2-4 集計方法

まず、5項目それぞれの記述をkJ法により分析し、各項目におけるボールルームダンスの特性を構成する要素を抽出した。

その後、抽出された要素の数量化のために、再びアンケートの記述をもとに、どの要素にどのような内容がどのくらい言及されていたか、経験による階層ごとに集計した。

例えば、「2人で組んで踊ること」という項目の「魅力」として「自分ひとりでは体感できないスピードや強さ。2人で踊ってじっくりいった時の気持ちよさ」という記述がある。ここに表われる表現を、kJ法で抽出された要素に振り分ける。同様にして、他の記述も、kJ法で抽出された要素に関わった表現を、各要素に振り分けた。各要素に振り分けた表現で、同一のものと判断した場

合は、要素の下位分類としてさらにその数を集計し、数量化を目指した。

KJ法は、ボールルームダンスには携わったことのない、造形表現専攻の修士2年生(当時)の女性にも協力をあおぎ、筆者の主観に偏らない分析を目指した。

また、構成要素の数量化は、1つの項目に対し3回見直して、その内容の洗練をはかった。なお、今回の調査ではサンプル数が少ないため、統計的検定は行っていない。

## 3. 結果および考察

### 3-1 「2人で踊る」

KJ法によって、「2人だからできる動きや表現がある」「2人の一体感を感じる」「相手との関わりや交流ある」の3つの要素が抽出された。数量化の過程において、「1人では出来ない動き、表現が出来る」、「(パフォーマンスのよさや内的に喚起されるものなど)得られるものが倍以上である」、「2人が合ってくるおもしろさがある」、「2人で合わせる難しさとそれを乗り越えるおもしろさがある」という下位分類が見出された。

初心者では具体的な記述自体が少なかったが、「相手との関わり・交流」に関する記述が割合が多く、一方アマチュアの回答で、2人で組んで生み出されるものに関する言及の割合が大きい。「相手との関わり・交流」は、「内的経験」を交し合うことであり、舞踊というものが持つ共通の特性といえる。競技キャリアの長い、アマチュア回答者から「2人だからできるパフォーマンス」「2人が合ってくること」という記述を多く得られた

表2 「2人で組んで踊る」ことに関する記述の集計結果（分析対象表現：37個）

2人で組んで踊る	2人だからできる動きや表現がある			2人の一体感を感じる		相手とのかわり、交流がある	
	1人では出来ない動き、表現が	得られるものが倍以上	身体が拡張した感じがする	2人が合うおもしろさ	2人で合わせる難しさ		
アマチュア	5	2	1	1	2	1	12
4回生	4	1		2	6	3	16
初心者	1			1	3	4	9
小計	10	3	1	4	11	8	37
合計			14		15	8	37

表3 「男女で踊る」ことに関する記述の集計結果（分析対象表現：29個）

男女で踊る	性に対して意識させられる	男女という異質性に由来すること		男女のあり方に対する意識に変化があった	エスコートされたりリードされることが気持ちいい	
		男女それぞれの役割、表現でよりよいパフォーマンスが出来る	異なる互いの意見をぶつけ合うことで発見がある			
アマチュア	1	4	1		1	7
4回生	2	6	2	1		11
初心者	1	6	2	1	1	11
小計	4	16	5	2	2	29
合計	4		21	2	2	29

ことから、ボールルームダンスをはじめた初期は、「2人で踊る」ことの内的な関わりや交流が意識されるが、やがて「2人で組んで踊る」ことの特徴にふれることになっていく過程が見出されよう。

したがって、ボールルームダンスは、「2人で組んで踊る」ことで、「2人で踊る」ことに生起する「内的経験」の関わりにとどまらない2人の関わり方があることが示唆される。稲垣の研究には、「体重と体重のコミュニケーション」<sup>14</sup>という語が出てくるが、これも、「2人で組んで踊る」ことに起因する関わり方であるといえる。今回の調査では、「1人では出来ない動き、表現が出来る」、「(パフォーマンスのよさや内的に喚起されるものなど) 得られるものが倍以上である」、また、「2人で合わせる」、さらにその難しさを乗り越えた後にもたらされる、「2人が合ってくるおもしろさ、奥深さ」という表現に要約された。

また、ボールルームダンスでは、男女が組んでいて「ワン・ピース」<sup>15</sup>となり、気持ちよく踊り続けられる組み方、動き方は、微細なずれを許さない。テニスのラケットに、そこに当てれば球が

一番気持ちよく打ち返せる－最も少ない労力でベストな返球のできる－「スイートスポット」が存在し、そこからわずかでもずれるととたんに打ち返す労力が大きくなることと同様であろう。「ワン・ピース」は、自分自身の動きや姿勢や相手に対する位置などだけでなく、「2人」そのものの動きなどにも意識を払い続ける難しさを乗り越えて初めて実現できる。「身体が拡張した感じがする」という記述は非常に端的にこのことを表したものであろう。

### 3-2 「男女で踊る」

KJ法にて大まかに抽出した際には、「性に対して意識させられること」と、「男女という異質性からもたらされるもの」の2点に集約されたが、量的には、男女という異質性から表現が多様になったり、パフォーマンスの質が上がったりすることが、この特性の中核をなしていることが示唆された。

この結果から、次のようなことが読み取れる。すなわち、日常で意識するものとは異なる関係の

男女-家族や恋人ではない男女-が、互いのまなざしも汗も間近に感じながら気持ちを合わせて踊ることを通して、最初は互いの性に対し意識することがある。やがて、男女が当たり前に存在する社会における、官能の対象としてではない、男女の親密なあり方というものを受け入れていく過程である。その過程の到達点には、男女がそれぞれの役割を果たして、互いのよいところを發揮し、サポートしあって一つの表現を達成する姿があるといえる。

ボールルームダンスを授業で取り入れた実践報告からは、始めは男女で手をつなぐことに抵抗を感じていた子どもたちが、単元最後のダンスパーティーの時間では自然に踊っていた姿が報告されている<sup>16</sup>。上述の、男女関係の意識の変化と受容が、この先行研究にも見出されるのではないだろうか。

### 3-3 「リズム」

KJ法によって、大きく「リズムの多様性」と「リズムそのものがもたらす快感」の2つが抽出された。後者は様々なダンスに共通する特性であり<sup>17</sup>、ボールルームダンスにおいてもそれは例外ではないことが示された。「リズムの多様性」に関しては、特に種目<sup>18</sup>によって様々なリズムが楽しめる、「種

目の違いによる多様性」が割合として大きい。

実際、ボールルームダンスはリズムの種類自体は豊富だが、ひとつひとつの種目は3つほど振り付け（専門用語でフィガーという）を覚えれば踊り続けられる。パーティーなどに行けば、体力の許す限りは数時間で10種類近くのリズムを体験することも可能なのである。また競技会で踊られる10種目の存在は、競技選手にとって、ダンスを深く追求する楽しみも与えてくれている。

このように、ボールルームダンスを踊ることは、様々なリズムを通して、様々な運動と感情を体験することに等しく<sup>19</sup>、そのことがボールルームダンスの「リズム」の魅力ではないかと考えられる。集計からもこのことは示されたといえよう。

### 3-4 「音楽」

KJ法によって、「同じリズムでも音楽が変わればパフォーマンスや表現が変わる」「自分自身の心身に影響を及ぼす」「音楽に乗せてからだを動かすこと自体に楽しさがある」「ダンス音楽そのものに魅力がある」の4要素を抽出した。数量化してみると、特に突出した特性が見出されることはなかったといえる。

ここで筆者が注目したのは、「ダンス音楽その

表4 「リズム」に関する記述の集計結果（分析対象表現：30個）

リズム	リズムの多様性				リズムそのものがもたらす快感							
	種目の違いによる多様性	人によってとり方の表現に個性が出る	カップルのとり方の表現に個性が出る	同じリズムも音楽によってとり方が違う	リズムにのる快感	体が勝手に動く	本能を刺激される	常に一定であるところ	リズムが2人で合うと気持ちいい	聴きなれた音楽とは違うリズムを体感する		
アマチュア	5	1				2	1					9
4回生	7	3	1	1	3			1	1			17
初心者	3										1	4
小計	15	4	1	1	3	2	1	1	1	1	1	30
合計				21							9	30

表5 「音楽」に関する記述の集計結果（分析対象表現：31個）

音楽	音楽によるパフォーマンスの変化、多様化	自分自身への影響		音楽に乗せてからだを動かす楽しさ	ダンス音楽そのものにある魅力	
		感情に変化をもたらす	からだ勝手に動く			
アマチュア	1	3	1	2		7
4回生	5	2	1	3	3	14
初心者	2	3		1	4	10
小計	8	8	2	6	7	31
合計	8		10	6	7	31

ものにある魅力」である。ここでは、「今までこういう音楽に興味がなかったのに、今（ダンスの）練習で聞く音楽は新鮮で、またいい曲が多いと思う」「（ラテン種目を踊るにあたって）ラテン系の音楽に関する興味が湧いたこと」など、それまで自分が持っていた音楽経験とは異なる、新しい音楽経験が発生したことを示す記述が挙がっていた。また、「みんながよく知っている身近な曲でも踊れる所」「ほとんどの音楽がピッチを変えるだけでダンスミュージックになるからステキ」など、既存の音楽体験に新たな発見が加わったことを示す記述もあった。

これは、普段は耳が聞き流してしまう音楽をも、ボールルームダンスというチャンネルを通すことで、より深く味わったり、体験したりすることができることを表してはいないだろうか。リズムを体で感じ取り、実際にそれを表出させることで、耳で聞くだけとは異なり、五感を使って音楽に接する体験を、ボールルームダンスが与えていることを示唆している。このようなダンス経験を通して、普段は接することのないさまざまな音楽に接し、豊かなイメージの涵養やさまざまな感情の体験ができることが、ボールルームダンスにおける「音楽」の重要な特性といえる。

### 3-5 「踊っているときに感じていること」

KJ法では最終的に「楽しい」「気持ちいい」という快感情と、「しんどい」「必死」「はずかしい」という踊ることへの困難さを示す感情のふたつに集約され、数量化によって、快感情が具体的にどのような内容で記述されているかさらに分類された。「リズム」「2人」「音楽」など、1～4の各項目の結果と重なる回答も見られた。大まか

な傾向として、「アマチュア」→「合う」ことが気持ちいい、「4回生」→「周囲の心を捉えること」に意識が向いている、「初心者」→「踊ることがただただ楽しい」という様相が浮かびあがってくる。ここには、初心者がキャリアを積むにつれて、踊ることの楽しさが「ただ楽しい」ということからより具体的になってくることもわかる。また、筆者の経験から、競技ダンス部の4回生は部では最終学年であり、なんとか競技会で成果をあげたいという思いが、見ている人の心を少しでも引き付ける踊りをしようという意識につながっていることが予想できる。この点は、「4回生」であることの特長ともいえよう。

## 4. 集計されたデータもとにした質問紙案

今回の調査では、「人々をダンスにかりたてるダンスそのものの魅力」という視点に立ち、ボールルームダンス競技選手の日頃のダンス経験に対する自由記述から、「2人で組んで踊る」「男女で踊る」「リズム」「音楽」「踊っているときに感じること」の各カテゴリーに関して、「ボールルームダンスの本質的特性」の具体的な要素を明らかにし、その要素をもとにアンケート項目を新たに作成することを目指した。最後に、今回得られた各項目ごとの要素をもとに、今後の調査で多数のサンプルを対象にして統計的研究をするために、選択式の質問紙の案を作成したので挙げておく（添付資料）。

各項目を設けて焦点を絞り、より詳細に分析することで、ボールルームダンスの特性について具体的にすることができたといえる。例えば、「2人で組んで踊る」ことは、ボールルームダンスを

表6 「踊っているときに感じていること」に関する記述の集計結果（分析対象表現：34個）

踊っているときに感じていること	ただ楽しい、気持ちいい	合うことが気持ちいい			周囲の心を捉えたとき、捉えようと踊ること	からだを自由に、めいっばい動かすことからくる気持ちよさ	上手く踊らせてもらえることが楽しい	相手との関係を大切にして踊ること	
		音楽にのれたとき	2人が合ったとき	リズムに合ったとき					
アマチュア	1	3	3	1		1		1	10
4回生	4	2	2		4	2		2	16
初心者	5	1			1		1		8
小計	10	6	5	1	5	3	1	3	34
合計	10			12	5	3	1	3	34

(添付資料)

皆さんは、普段のダンス活動を通して、ダンスの魅力を十分感じていらっしゃると思います。では、そのような、あなたが感じるダンスの魅力は、次に掲げる項目と、どの程度関連していると感じていますか。各項目ごとに、当てはまる数字に○をつけてください。

	とても 関係して いる	関係して いる	ふつ う	あまり 関係して いない	全く 関係して いない
1. 音楽によって同じ種目でも表現やイメージが変わる。	5	4	3	2	1
2. 練習や競技会などで、周りで見ている人の心をつかんだと感じたとき、気持ちがいい。	5	4	3	2	1
3. 踊っているときの楽しさ、喜び、気持ちよさ、達成感など、心にわきあがる感情が、2人で組んで踊っていることで、増幅される。	5	4	3	2	1
4. 男女の関わり方に関して、恋愛や婚姻とは異なる、パートナーシップという関係がある。	5	4	3	2	1
5. 2人のリズムのとり方が合う。	5	4	3	2	1
6. 2人で組んで踊ることで、1人では生み出せない動きや、物理的に不可能な動きを体験できる。	5	4	3	2	1
7. 日常で耳にしているさまざまな音楽も、リズムやテンポが合えばそれに合わせて踊ることができる。	5	4	3	2	1
8. 男女それぞれの役割によって踊りの表現が豊かになる。	5	4	3	2	1
9. 女性として男性にエスコート、リードされる、または、男性として女性をエスコート、リードする。	5	4	3	2	1
10. 日常生活では体験できない動きや早さを体験する。	5	4	3	2	1
11. 音楽がかかったり変わったりすることで体が刺激され、踊りだしたくなったり、あるいはそれまでの踊りからもっと動きたくなったり、違う動きをしたくなったりする。	5	4	3	2	1
12. 2人で踊ることで、互いを慮る <sup>オモシバカ</sup> 気持ちや協調性、他人への関心などが生まれ、育まれる。	5	4	3	2	1
13. 種目によって、いろいろなリズムを体験できる。	5	4	3	2	1
14. 日常とは違った形で自分の性を意識する。	5	4	3	2	1
15. 体を使っているという感覚が気持ちいい。	5	4	3	2	1
16. 2人で組んで踊る中で、互いの境界がなくなったような感覚になり、一体化する（「ワンピース」になる）。	5	4	3	2	1
17. 体がダンスのリズムに刺激されて、勝手に踊りだしたくなるあるいは、それまでの踊りからもっと動きたくなったり違う動きをしたくなったりする。	5	4	3	2	1
18. ラテン音楽やジャズ音楽、3拍子のワルツなど、普段は聴かないタイプの音楽に触れることができる。	5	4	3	2	1
19. 2人で組んで踊ることで、1人ではできない動きや振り付け、イメージ作りなどが可能になり、表現の幅が広がる。	5	4	3	2	1
20. かかっている音楽が、自分の気持ちに変化を与え、曲の雰囲気に合わせてさまざまな感情を味わうことができる。	5	4	3	2	1
21. 異性と協働することで、自分では気づけなかった考え方や、自分ひとりでは感じ得なかった感覚などを発見できる。	5	4	3	2	1
22. 日常生活から離れて、リズムにのって踊るという体験をする。	5	4	3	2	1
23. 2人が一体化して踊ることの難しさを克服する過程がある。	5	4	3	2	1

成立させる大前提ともいえる「特徴」だが、さらにその具体的な内容が、「2人で踊ることの内的体験の関わり・交流」に加え、「2人だからできるパフォーマンスがあること」「2人が合ってくること」が独自の特性であることが示唆された。他の項目についても、「男女関係の意識の変容と受容」（「男女で踊る」）「種目の違いによるリズムの多様性」（「リズム」）「今まで経験したことのない音楽体験がもてる」（「音楽」）など、独自の魅力が浮き彫りになったといえよう。なお、今回の調査では、男女差では記述内容に突出した違いが見られなかったため触れてはいないが、統計的解析を行うことで、量的な違いが浮かびあがる可能性もある。

続く研究では、これらの項目の重み付けおよび分類を統計解析によって行い、その関係を分析する。「ボールルームダンスの本質的特性」のより具体的な内容に客観的に迫りたいと思う。

## 謝辞

データ分析の際にKJ法をお手伝いくださった、同じ研究室の土居泰子さん、自身の修士論文で忙しい中で、貴重な時間を割いてくださったこと、満足の行く分析に貢献してくださったことに多大なる感謝を申し上げます。

また、今回のアンケート調査にご協力くださいました以下の競技選手の方々に篤くお礼申し上げます。

大阪市立大学競技ダンス部長（調査当時）勝 正寿さん、部員のみなさん

神戸大学GREEN BACKS（競技ダンス部）女子主将（調査当時）高谷 由布子さん、部員のみなさん

駒野 愛子さん、駒野 浩志さん、中谷 真弓子さん、根笹 裕之さん、芳賀 理恵さん、森本 美由子さん、山下 大輔さん、渡部 健さん（50音順）

ご協力への感謝とともに、今後のご活躍をお祈り申し上げます。

## 注

<sup>1</sup> 英語で“Social Dance”というとき、フォークダンスや、ディスコダンスなど、「社交、親睦、交流の場などで踊られる民衆の舞踊」を指すが、いわゆる男女2人がペアになって踊る、日本語の「社交ダンス」が示すダンスは、英語では“Ballroom dance”（Ballはラテン語の「踊る」Ballareに由来する語でありBallroomは舞踏室という意味である）と呼ばれている。したがって本稿では、日本において一般に呼ばれている「社交ダンス」ではなく、意味を明確にするために「ボールルームダンス」の語を使う。

- <sup>2</sup> 永井 良和『社交ダンスと日本人』晶文社、1991
- <sup>3</sup> 財団法人日本ボールルームダンス連盟『ボールルームダンス授業化研究事例集（平成14年度～平成19年度）』、2008、山口 孝治、太田 緑、橋本 雅子、和田 尚「ボールルームダンスの教材化に関する実践研究 その1-小学校高学年を対象に感想文を手がかりにして-」『京都教育大学教育実践研究紀要』第5巻、2005：97-103 など
- <sup>4</sup> 長谷川みゆき「高校生のダンス授業における導入に関する一考察-社交ダンス（マンボ）の実践を通して」『お茶の水女子大学人文科学紀要』56、（2003）：181-196
- <sup>5</sup> 本田 弘子、鈴木 省三、仲野 隆志、石三 香織「生涯スポーツとしてのボールルームダンスの生理的効果について」『仙台大学紀要』25（1996）：33-41、木田 和幸、高畑 太郎、三井 博正、三田 禮造、野田 美保子「心拍数から見た社交ダンスの運動強度」『体力科学』45-5（1996）：550、小林 由実、宗像 恒次、橋本 佐由里「中高年者の社交ダンス活動と不安傾向の関連」『高齢者のケアと行動科学』11-2（2006）：16-25、竹内 正雄「社交ダンスが中高年の体力に及ぼす影響について」『運動とスポーツの科学』1-1（1996）：31-35など
- <sup>6</sup> 長嶋 優佳、水村 真由美「ボールルームダンス選手における体力特性と競技成績との関連」『体力科学』56-6（2007）：826、佐藤 美弥子、熊澤 祐輔、中島 幸則、中村 豊、河野 照茂「ダンススポーツ選手の体力 - 第1報 - 」『体力科学』51-6（2002）：706など
- <sup>7</sup> 三浦 弓枝、矢島ますみ「舞踊教育再構築（VII）-日本における舞踊教育の可能性- 21世紀におけるダンス教育のあり方-」『千葉大学研究紀要I 教育科学編』46（1999）：102
- <sup>8</sup> 三浦 弓枝、矢島ますみ「舞踊教育再構築（VI）-日本における舞踊教育の可能性- ダンスの教育的価値とダンス学習の発展（1）-」『千葉大学研究紀要I 教育科学編』44（1996）：131-139
- <sup>9</sup> 同上
- <sup>10</sup> 三浦、矢島、前掲（1999）：127
- <sup>11</sup> 舞踊とリズムの関係については、ドゥッラーの次の引用が端的に説明してよい。「すべての芸術は…人間の情動的経験の表現であり、それが、思想により、また意図的に与えられた形式によって、心の知覚できるなんらかの媒体に形づくられているのである。…たんなる手当たりしだいの運動も、単純な感情のもっとも直接的な放出であることを知るのである。（しかし）このような運動は、どのように表現的であっても、意識的に方向づけられた芸術表現としての舞踊と考えることはできない。…舞踊がひとつの芸術形式としての存在になるのは、これらの、でたらめな、しかし、表現的な運動がリズムの調和的な誘導に基づいて、意識的に形式を与えられるときである。」ドゥッラー、M. N.、松本 千代栄 訳『舞踊学原論』、大修館書店、1974、56-57
- <sup>12</sup> 板垣、「ボールルーム・ダンスの身体技法 - 歩行とコネクションに注目して」『横浜市立大学論叢人文科学系列』58-3（2006）：25-52
- <sup>13</sup> 競技化されたボールルームダンスを特にこう呼ぶ。近年では、「ダンススポーツ」という名称が主流となりつつある。大学競技ダンス部は、全日本学生競技ダンス連盟に加盟し、連盟主催の学生競技会に出場することが主な活動である。全日本学生選手権を筆頭に、各地区ブロック年間15前後の競技会が行われている。2008年現在、全日本学生競技ダンス連盟の加盟校は100校を超えその構成員は約3,000人である。サークル扱いの大学もあるが、大学体育会に所属するものもある。（全日本学生競技ダンス連盟：www.univ-dance.gr.jp/index-j.html 2009年3月現在閲覧可能）

- <sup>14</sup> 板垣, 前掲, 28
- <sup>15</sup> 筆者の経験や, ダンス指導においていわれていることから述べると, 2人が合った瞬間というのは, 相手の重さや「相手に組んでいる, 組まれている」という感覚が感じられなくなり, 2人が完全に一つになって動いている感覚がある。この感覚は「ワン・ピース (になる)」と表現される。
- <sup>16</sup> 山口ほか, 前掲, 97-103
- <sup>17</sup> 畑野は, 高校生, 大学生を対象としたダンス授業において, ダンス独自の楽しさの因子としてリズムが抽出されたことを述べている。さらに具体的に, 「リズムミカルに動いたり, 音楽のリズムによって踊ることが, その中核をなしている」ことが示されている。畑野 裕子「ダンス授業の好嫌を規定する楽しさ要因の検討 (II) -高校生を対象として」『兵庫教育大学研究紀要』9 (1989): 125-139 (引用部分は133) および畑野 裕子「ダンス授業の好嫌を規定する楽しさ要因の検討 (III) -大学生を対象として」『兵庫教育大学研究紀要』10 (1990): 113-124
- <sup>18</sup> 競技会で踊られる国際基準種目は, ワルツ, タンゴ, ウィンナー・ワルツ, スロー・フォックストロット, クイックステップ, サンバ, チャチャチャ, ルンバ, パソ・ドブレ, ジャイヴの10種目である。それぞれが固有のリズムを刻んでいる。例えば, ワルツなら強拍弱拍弱拍で構成される三拍子の, タンゴなら強拍弱拍の二拍子のリズムによって組み立てられている。また, パーティーなどで踊られるマンボやジルバ, ブルースなどもあるし, 本場ともいえるラテンアメリカのクラブや音楽シーンではサルサなど, 次々と最新のダンスが生み出されている。
- <sup>19</sup> ドゥブラーは, ボールルームダンスのリズムが, そのリズム特有のステップを踊り手に喚起し, その運動体験が今度は踊り手の気分喜びや活力を及ぼす, という, 運動と感情の連合に対するリズムの働きのメカニズムを示している (ドゥブラー, 前掲, 131-132)。舞踊運動と感情の連合を支えているリズムの働きについては柴の論文に詳しい。柴 真理子「感性メディアコミュニケーションと舞踊学」『電子情報通信学会技術研究報告』102-174 (2002): 19-20